

ロサ・ペルシカ

長岡 求

今年の花葉会ツアーはカザフスタンを選び、5月29日に成田を出発、6月6日に帰国した。カザフスタンは西のカスピ海から東の中国の間に横たわり、北側でロシアと接し、南側は天山山脈に続く山脈などを境にしてキルギスやウズベキスタン、トルクメニスタンに接する。中央アジアといえばカザフスタンとその南に位置する三か国にタジキスタンを加えた五か国からなる地域をいう。カスピ海の東側にはカラクム砂漠が広がり、それを囲むように温帯草原（ステップ）があり、農業は牧畜が中心となる。また南東部には高地地中海性気候と呼ばれる、夏に乾季をもつ気象条件をもつ地域があり、やや雨が多いものの風景としては草原が広がる。

今回の宿泊地はアルマトイ（Almaty）と、シムケン（Shymkent）の近くにあるジャバグリ（Zhabagly）。アルマトイはカザフスタン第一の都市（首都はアスタナ）で、キルギスのすぐ北側に位置する。気候は高地地中海性気候となり、南側にある天山山脈から流れ出る水が豊富なことからアルマトイの街中は高木が茂る緑豊かな町だった。ツアーでは天山山脈にあるイレ・アラタウ自然公園（Ile-Alatau National Park）を中心に視察した。もう一か所のジャバグリは西天山山脈の麓の村で、アクス・ジャバグリ自然保護区（Aksu-Zhabagly Nature Reserve）の中心にあり、アルマトイに比べると雨量が少ない様子で、乾いた草原が広がっていた。滞在中は毎朝ジャバグリを出発し、周辺の山岳地に出かけて自然観察を行った。

表紙写真はロサ・ペルシカ（*Rosa persica*）で、ジャバグリの北方のカラタウと南西のアクス峠の2か所で見ることができた。カラタウは『黒い山』を意味するカザフ語で、今回訪問した中では最も乾燥していて、山は見るべき植物も少なかったが、春にはチューリップの花で山全体が黄色や赤に染まると聞いた。ロサ・ペルシカは、その山の中でもあちこちに育っており、かなりの乾燥に耐えることが推測された。もう一か所は西天山山脈を越えてキルギスに至るアクス峠に至る

途中で発見した。カラタウに比べて雨が多いのか、草原の緑が保たれ、ロサ・ペルシカが育っていたのは道路わきのがれた裸地であり、群落を作っていた。株の育ちは後者のほうが良く、写真もそこで撮影したもの。ロサ・ペルシカについて調べると原生地はアフガニスタンからイラン、中央アジアから西シベリアまでと、かなり広い範囲に分布を広げる。自生環境はステップから砂漠にかけてで、深根性で栽培は難しいとある。また樹高は60～90cmとあるが、私たちが見たものは15～20cmほどだった。葉表はろう質で、葉縁にはヒイラギのように棘があり、茎や果皮の表面にも針状の固い棘が密集していた。バラ属の中では特異な形質をもち、*Hulthemia persica*として別属に分ける学説もあるが、バラ属の他種と種間交雑が可能であり、我が国でもペルシカ・ハイブリッドとしていくつかの品種が入手できる。

今回のツアーはラタウを除き、宿泊地から南に谷筋を変えながら山に分け入り、ところどころで車を止めての花の観察会となった。どの谷筋も植生は比較的単純で、目にする種数は少なめだったが、不思議と谷筋が変わるごとに植物が変わり、面白かった。私自身、全部で2千カットほどの写真を撮り、230種ほどの種を認識することができた。